『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第８０回】

今回から「人間がもたらす悪」について考えていきます。第 9 回や第 19 回などで、悪の問題は「神の問題」ではなく「人間の問題」であり、『聖書』は人間の苦しみと悪の問題を、人間の「自由と責任」という視点からとらえようとしているという森一弘師のことばを引用しました。そこで、「自由（自由意志）」ということばをキーワードにして悪の問題を掘り下げていこうとおもいます。

✞ 神さま、なぜあなたが創った世界に「悪」があるのですか？（5）

神さまが与えてくださった「自由意志」

神さまは人間に自由意志をお与えになった ―。自由意志とは、ほか（の人たち）から強制や拘束、妨害などをうけないで、自分の言動を自発的に決める意志です。自分で考え判断して決断する自由意志にもとづく行為は、その人の人間性を高める可能性をもっています。「〇〇になって、人を救いたい」、「〇〇をして社会の発展に役立ちたい」… と奮闘努力し、その夢を実現できれば、こんなしあわせなことはないでしょう。その努力はすばらしいものです。それによって得た称賛、地位、名声、お金 … は当然の報酬・見返りと言えます。

しかし自由意志は、人間としての道を誤らせることがあることも事実です。人はだれしも欲深いものです。「もっとお金がほしい」、「さらに高みに立ちたい」… という気もちになりがちです。そのためにはさらに激しい競争を勝ち抜かなければなりません。自分を追いかけてくる人たちの足音が不安をかきたてます。そこで、それまでに得た人間関係、財力、地位などの「力」を頼りにして保身を図ろうと画策します。昨今の政治家や一部のスポーツ関係者の権力の私物化、横暴、エゴイズム … をみれば明らかです。自分を過信し、自分より下の立場にいる人たちを軽視し、いつしか人間としての本来のあり方から脱線してしまう危険性もあるわけです。「人間のエゴイズムや欲望が世界を悲惨なものにしている」と森師が指摘するとおりです。向上心がもたらす人間の成長や社会の発展と、エゴイズムや欲望がつくりだす悪や悲惨さは切り離せないといえます。

「この世の地獄」― 強制収容所の実体

人間がもたらす究極的な悪のひとつに、「戦争」があります。政治・経済などにおける国際的地位の安定と、さらなる優位をめざす国家（権力者）。利益の増大をめざす一部の資本家や大企業。彼らを支持する国民。そこに民族的・宗教的対立なども入り交じり、さまざまな人間のエゴイズムと欲望が激しくぶつかりあう戦争。それはなぜか、いつも「正義」の名のもとにおこなわれ多くのいのちが奪われます。その渦中に巻きこまれた人間は何を考え、どう行動したのかを『夜と霧』という一冊の本を取りあげて、人間の「光」と「影」についてみていきましょう。

この本は、強制収容所という極限状態に置かれた人間は何に絶望し、何に希望を見出すか ― を自らも収容所生活を強いられた Viktor Emil Frankl（1905-1997 オーストリアの精神科医）が著したドキュメンタリーです。原題は『EIN PSYCHOLOGE ERLEPT DAS KONZENTRATIONSLAGER in … trotzdem Ja zum Leben sagan』、訳すと『ひとりの心理学者、強制収容所を体験する … それでも生に然りと言う』となります。

Adolf Hitler（1889-1945）は 1941 年、国家社会主義ドイツ労働党（ナチス）と国家に対して反逆の疑い

のある者をとらえ、収容所に拘禁せよという特別命令をだしました。この命令は夜陰に乗じ、霧に紛れて秘密裏に実行され、ユダヤ人の一家が一夜にして神隠しのように消えてしまう事件が各地で起こりました。それゆえ通称「夜と霧」命令と呼ばれたのです。

フランクルはいくつかの収容所を経験しました。その中でもアウシュヴィッツ(Auschwitz)強制収容所は「絶滅収容所」とも言われ、人々にもっとも恐れられていました。毎日数千人のユダヤ人が連行され、約95%の人々(女性やこどもたち、高齢者や病人、心身にハンディキャップがある人たちなど)は「労働力なし」とされ、収容所に到着後まもなくガス室に送られるか銃殺されました。それをなんとか免れた人たちは度を超えた重労働を強いられ、人体実験に利用された人たちもいました。

収容所の生活はどのようなものだったのでしょう。食事は一日一回。ちっぽけなパンに水のようなスープと、20ｇほどのマーガリンかひと切れの粗悪なソーセージ、あるいはチーズのかけらや水っぽいジャムがスプーンに一杯などが日替わりで添えられただけでした。カロリー不足の身体に伝染病(発疹チフスなど)も襲いかかり、多くの犠牲者が出ました。

重労働の疲れをいやす時間であるはずの夜も、とんでもない条件の中で過ごすほかはありませんでした。三段のベッドは、一段が縦２ｍ、横２．５ｍほどのむき出しの板敷き。そこに９人が横になるという窮屈さ。９人が横向きになり、びっしり体を押しつけあって眠らなくてはなりませんでした。寒い冬は居住棟には暖房などありませんから都合がよかったかもしれませんが、暑い夏はどうだったのかは説明するまでもないでしょう。

毎日、病気や飢餓、銃殺などで多くの人たちが命を落とす姿を見ていると、それが「異常」ではなく「あたりまえ」になり、そこで生き抜くためには「驚かない・嘆かない・怒らない・悲しまない …」、つまり「無感動・無感覚・無関心」などの防衛策を身につけていくことが最良の方法になります。フランクルはこれを「感情の鈍麻(どんま)」「心の装甲」と名づけています。

「生と死」を分けたものとは

精神科医であるフランクルは、収容所から「生きて帰ってこられた人」と「帰れなかった人」を分けたものが二つあったといいます。

【そのⅠ】　**「未来に対して希望を持ちえているか・否か」**。クリスマスから新年にかけて、収容所ではそれまでになかった数の死者が出ました。原因は過酷な労働でも餓死でもありません。「クリスマスには休暇がもらえて家に帰れる」という期待をもった人々が、裏切られ落胆して病気を悪化させたり、自らいのちを断ったのでした。フランクル自身は「自由の身になったら書きかけの原稿を完成させたい」という目標があり、「自分の本を苦しみと闘っている人たちが待っている。だから何としてもこの本を世に出さなければ …」という使命感が自分を支えていたと書いています。

【そのⅡ】　**「精神的に高い生活をしていた感受性の豊かな人間か・否か」**。最悪の環境の中においても、祈ること・感謝することを忘れない心の持ち主、すなわち強い信仰を持ちつづけた人たちは生き延びる確率が高かったといいます。精神の自由と豊かさをもつ人々には、〈もうひとつの世界〉への通路が開かれていた ― とフランクルは書いています。

人間は「人生から問われている存在」である

フランクルは、「人生の意味を考える〈視点〉を 180 度転回させなさい」と説きます。人はだれでも人生の途上で、「いったいなぜ、私がこんな目に遭わなければならないのか？」という問いを発せざるをえない出来事を経験します。しかしフランクルは、その嘆きは『その問いの立て方その

ものが誤っている』のであり、『人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれに期待しているかが問題なのである』と考えます。

人間は「人生から問われている存在」である ― というのが、彼が人生の意味を問うときの基本的な観点、立脚点になります。そして人間が自分の「主観」で人生に意味があるか・ないかを決められるのだという姿勢・構えそのものが傲慢なものであり、私たちがしなくてはならないことは、人生のさまざまな状況に直面しながら、そこに潜んでいる真の「意味」を発見し、自分に与えられている「使命（ミッション）」に全力で応えていくことだけなのだ ― とフランクルは言います。彼の思想のもっとも大切なものについて、諸富祥彦（もろどみよしひこ）氏（明治大学文学部教授）は次のようにまとめています。

†どんなときにも、人生には意味がある。

†人生のどこかに、あなたを必要とする「誰か」がいる。あるいは「何か」がある。
その「誰か」・「何か」はあなたに発見され、実現されるのを「待って」いる。私たちはいつも、この「誰か」「何か」によって必要とされ、「待たれている」存在である。だから、今がどんなに苦しくとも、あなたはすべてを投げ出す必要はない。

†いつの日か、人生に「イエス」と言える日が必ずやってくる。たとえあなたが人生に「イエス」と言えなくても、人生があなたを「イエス」と受け容れてくれる日がいつか、必ずやってくる。

誰かがあなたを待っている！

私たちが歩む「人生の道」は決して平坦ではありません。デコボコ道もあれば、曲がりくねった道もあります。上り坂や下り坂もまっています。寄り道したり、思いもよらぬ脇道に迷いこんでしまうこともあります。そんなとき私たちは、「この人生で、あなたに与えられている使命は何ですか？」、「あなたのことを必要としている誰かがいたり、何かがあるのではありませんか？」、「その誰かや何かのために、あなたにできることは何ですか？」と人生から問われているのだ ― と、フランクルは言うのです。

過酷な労働を強いられる収容所生活は、人間から希望を奪いました。多くの人たちが自殺を考えました。そんな彼らに接したとき、フランクルは「あなたには、あなたを待っている誰かがいませんか？」、「やり残した仕事や、あなたを必要としている何かがありませんか？」と問いかけました。そうすると何人かは、自分を待っている妻や子供たち、やりかけた仕事を思い出し、自殺を思いとどまったといいます。

人間は「聖人」にも、「悪人」にもなり得る …

「神など信じられない。こんな苦しみを受けているのに神はなにもしてくれない。信じられるのは自分ひとりだ …」。苦悩の毎日のなかで囚人たちは瀕死の仲間のパンを盗み、動かなくなった他人の衣服や靴を奪いました。ときには脱走する計画をもっている仲間をナチスの兵隊に密告して、彼らのご機嫌を取り、なんとか生き延びようとした者もいました。沈黙している「神」よりも、「ひと切れのパン」「自分のいのち」の方が重要だったのです。

しかしフランクルは、どんな過酷な状況の中でも「人間は聖人にも、悪人にもなり得る」という事実を目の当たりにしました。収容所の彼方に沈もうとする夕日を見て、「世界はどうしてこんなに美しいんだ！」と感動する心をもちつづけていた人たちがいました。さらにおどろくことは、自分も飢えているにもかかわらず、もっと腹をすかせている人にひと切れのパンをゆずった人もいたのです。自分に与えられた状況をどのように受けとり、それに応えていくかという自分の「生」の

根本にかかわる「自由」を私たち一人ひとりはもっていて、その自由は誰にも奪えるものではないとフランクルは言います。

「ここに愛がないのなら …」

遠藤周作氏は、人間がさまざまな苦悩の状況にあるとき「なぜ神は黙っているのか？」、「神はほんとうにいるのか？」を多くの作品の中で問いつづけた作家です。代表的な小説は『沈黙』であることはご承知のとおりです。遠藤氏は 1976 年にアウシュヴィッツを訪れました。その経験をもとに書かれた作品がいくつかあります。そのひとつである『女の一生 二部・サチ子の場合』に「パンをゆずった男」の話が出てきます。アウシュヴィッツにおける取材をもとにした収容所における人間模様がみごとに織り込まれています。すこしご紹介します。

ヘンリックは、収容所とは愛などを信じていれば、自分が殺される世界であり、思いやりや同情から他者のためになにかをすれば、こちらが生きていけない世界だ ― と考えている男でした。彼は収容されてまもなく、ポーランド人のカトリック神父に出会いました。ありったけのエゴをさらけだし、仲間をだまし、どんなきたないことも生き延びるためには行う人間をイヤというほど見せられる収容所のなかで、神父は「愛」を説いていました。ヘンリックは神父に問いかけました。「ここに … 愛があるのかね、神父さん。あんた、本当にそんなことを信じているのかね」。神父は答えました。「ここに愛がないのなら … 我々が愛をつくらねば …」。「馬鹿馬鹿しい。もうたくさんだ！」。女性や幼い子どもたちがつぎつぎと殺されていく現実を、毎日のように見てきたヘンリックは「収容所のどこに愛があるんだ」と神父に詰め寄りました。

また、ある日ヘンリックは「この収容所は地獄だ」と吐きすてました。それに対し神父は、「まだここは地獄じゃない。地獄とは … 愛がまったくなくなっている場所だ。しかしここには、愛はまだある」と言い、自分のパンを分けた囚人の話を彼にしました。「私はそれを見て、人間がまだ信じられると思った。人間はどんな時にでも自由が残されている …。あの人は弱った仲間の前で自分のパンを全部食べて当然だったんだ。それなのにあの人は与えたんだ。どんなひどい状況や事情のなかでも ― 人間は愛の行為をやれるんだ」。ここでもヘンリックは「あんたが人間を信じるのは勝手だ。だが俺はここでは他人は信じない。(誰もが)お前のことを偽善者のセンチな甘い馬鹿野郎だと言うだろう。くたばれ」と毒づきました。「まだ人間は信じられる」と言う神父。それに反発するヘンリック。ある日、神父の信じられないある行動が彼の閉じきった心を開かせます。次号でご紹介します。

神さま、私たちはつらいとき、くるしいとき、かなしいとき … あなたを見失うことがあります。でもそれは、あなたがいつも私たちの傍らにいらして、一緒に耐え、苦しみ、泣いてくださっていることをあらためて知るときでもあります。どのような「きょう」という日でも、感謝と祈りのうちに過ごせる恵みをお与えください。

(2019.01.29.)

【引用・参考にした書籍など】

・諸富祥彦 『100 分 de 名著 フランクル 夜と霧』(NHK 出版、2012)
・V.E.フランクル、池田香代子 訳 『夜と霧 新版』(みすず書房、2013)
・今井真理 『それでも神はいる 遠藤周作と悪』(慶應義塾大学出版会、2015)
・遠藤周作『女の一生 二部・サチ子の場合』(新潮文庫、1986)